日本医史学雑誌　第60巻第1号（2014）　87–96

池田文書の研究（48）

医師の書簡（その7）

池田文書研究会

［114］平野好徳の書簡

平野好徳は文政7年近江坂本に生まれる．典薬寮医師・少典医・医員を経て明治19年侍医局勤務となる．33年没．享年77．（1824–1900）

1　明治　年3月19日　（2570）

再啓，御出頭之義は御奥向可然難有存居候段，宜御取成奉希上候也

拝啓，過日は参舘願置候件，唯今岩佐様より拝命、回文を以御伺被下候処，杖御次迄ナレハ無差支旨新樹典侍殿[1]より被申候旨御通達候ニ付，明廿日より出番仕度，侍医局迄御届仕置候間，此段申上置候，局参上万々奉拝謝候，頓首拝

三月十九日　好徳

池田様　侍曹御中

（1）新樹典侍　侍従高倉永胤の娘　高倉寿子（かず）．

2　明治　年12月22日　（2571）

口上

一，蜜柑　壱箱

右は麁味之至御座候得共拝呈仕度，宜御披露披成下度奉願候，以上

十二月廿二日　平野好徳

池田様　侍者御中

3　明治　年5月21日　（2572）

口上

一，交肴　壱折

右麁味之至御坐候得共，御留守中御見舞之証迄ニ拝呈之仕度，御笑味可被成下候，以上

五月廿一日　平野好徳

池田謙斎様　御留守宅御中様

［115］弘田親厚（ちかあつ）の書簡

弘田親厚は土佐国出身．緒方洪庵の適塾・華岡青洲の華岡塾含水堂にて西洋式外科医術を学ぶ．戊辰戦争時軍医として活躍．長男親安は明治39年和光堂薬局を創立する．3男長（つかさ）は明治13年東大医学部卒業．東大初代小児科教授．34年7月昭和天皇（当時迪宮（みちのみや））の侍医を勤める．昭和3年没．享年70．（1859–1928）

1　明治20年3月8日　（2575）

謹て呈愚翰候，閣下倍御安泰御坐被為成奉恭賀候，随て私依旧相勤候，乍憚御省情奉仰候，総て御安否も不相伺失敬御海恕可被為仰付候，陳ハ忽卒御内願仕候儀定て御呵責を相被り可申とハ存候へ共，愚情不得止乍恐縮一応陳述仕候，扨は豚児長儀於医科大学卒業後同科ニ於て外科助手被命一年余相勤，尓後熊本県へ被聘同県ニ勤事三年余，去十八年一月独逸国へ游学，尓来ストラースブルグ府ニ於て小児科専門を以相学ひ居申候，已ニ本年ニて三周年ニ相成候ニ付，来廿一年二三月頃ニは帰国仕候予定ニ御座候，乍恐当時皇室洋式専門之唖科[1]御備え之様奉恐察候，恐多くも聖寿万歳皇子殿下振々御誕生之御手当ニ早晩専門之唖科御備ニ可相成様愚考仕候，就てハ不敏之者ニ候へ共長儀帰国之上ハ皇室へ御召使被仰付候様相成り間敷哉，仰慕此事ニ奉存候，若幸ニ閣下之御推挙ニ依り願望相協候儀ニも候へは，今年猶数月有之候ニ付是より一二之大都府へ経歴，猶又研究候様之御内命も賜り候時は一層知識を拡め，不而已彼か身ニ取り無上之栄誉ニ感銘仕，一段憤励を加へ可申と存候間，何卒御憐顧を被為垂願望相協候様御執成之程奉懇願候，右は冒尊厳内情申上候段多罪之至ニ御坐候へ共愚情御垂憐御海容奉祈候，時下

猶余寒料峭折角御自重之程奉仰候，謹言

三月八日　　弘田親厚

池田従四位閣下　執事

（1）唖科　小児科の事.

［116］福井周作の書簡

福井周昨の詳細不明．書翰の内容より医師と推定した.

1　明治　年4月25日　　（2577）

拝啓，陳は今回ハ殊之外御手少ノ処，御暇ヲ戴キ昨廿四日午後六時途中無事帰国仕候間，此段厚ク御礼申上候，付テハ愚母儀本年三月初旬ヨリ発病シ日々心窩部ニ疼痛ヲ発生セシトノコト，由リテ心窩部触診致シ候処，胃部ニ圧痛及ビ大人拳大［村田氏寿殿ノ状態ト殆同一］ノ硬結物ヲ触知致シ候ニ付，恐ラクハ胃ノ癌腫ナラント想察致シ候，付テハ状態モ逐日衰弱之模様ニハ御座候ヘトモ茲二三週間内ニハ鬼籍ニ登ル様ノ事ハ此レナキ様愚考致サレ候ニ付，先生ノ方モ多忙ニ御座候故実母及ビ親戚ヘ相談ノ上地方ノ医士ニ托シ，遅クモ来月即チ五月一日頃迄ニ帰東致シ度心得ニ御座候間，其迄ノ御猶予成シ被下度此段偏ニ奉願上候也，謹言

四月廿五日　　福井周作

恩師　閣下

［117］福迫太三次・福迫太市の書簡

福迫太三次は軍医．太市は太三次の兄.

1　明治　年7月19日　　（3227）

謹啓，愈御機嫌克被渡候御儀と恐悦ニ奉存候，次ニ私事本隊と共ニ去十六日午前十一時旧宿舎荏原郡世田ケ谷村羽根木を出発徒歩品川駅ニ向ひ，此間靴傷患者三名日射病患者三名を出し午後三時漸く品川着（此里程二里半），仝六時四十三分該駅発各停車場ニて篤志家有志者之熱誠なる勧（ママ）迎勧（ママ）送を受け，十七日午前七時浜松にて朝食を喫し，十二時半名古屋ニて昼食シ，晩餐ハ前原ニ於て済まし，十八日前八時岡山ニて朝食シ，昼食ハ糸崎ニ於て致し，仝六時（即昨夕）広島駅ニ到着，直ニ一里半之里程を行軍，当宿舎ニ参り候節ハ彼是七時半頃ニて有之候ひし，着舎後直ニ四五之患者之診断をなし，尋で沐浴して（欠）発し直ニ昏々たる睡魔ニ襲はれし次第ニ御坐候，然シ途中之勧（ママ）迎ハ驚く可き者ニして，夜ハ篝火、花火等，昼ハ楽隊軍歌唱歌ニして食飼茶果（ママ）等至ラさる処なく，殊ニ本隊ニ於てハ将校ハ隊長と小生との二名ニて特別之優待を受け申候，次ニ当地滞在ハ四五日間ならんと存じ候，然して目的地ハ変して蒙古方面之模様ニ御坐候得ば上陸ハ多分営口[1]ならんと之事ニ御坐候，愈出征之上ハ珍談奇事有之毎ニ御報告致し可申候，先ハ右不取敢御報告まで，折角不順之季節柄随分御自重祈り上申候，再拝

七月十九日　　太三次　拝

恩師池田先生　閣下

（1）営口　清国遼東半島西側基部にある都市.

2　明治38年3月3日　　（3228）

謹啓，余寒未だ甚敷御坐候処，閣下ニハ愈御機嫌克御坐被遊候御事と珍重ニ奉存候，降て私儀無事ニ罷在候，次ニ本月中旬上京之予定ニ御坐候ひしも，種々の事情ニ依り延引仕り明後五日愈出郷，途中福岡・横須賀え立寄り，来る十二三日頃着京の賦（ママ）りニ御坐候，着京之上は直ニ伺候可仕候，先ハ右上申迄如斯ニ御坐候，早々再拝

三十八年三月三日　　太三次

池田先生　閣下

3　明治　年12月8日　　（3226）

謹啓，御病人事其後脉膊呼吸共一時宜敷相成候へども，七時二十分頃ニ至り脉膊甚だ悪く（即ち小ニして手ニ漸く触れ且ツ結代（ママ））相成候故，カンフル注射を二筒致し漸く少しく恢復致候処，亦今八時半ニ至り脉大ニ悪く御苦悶被成候故カンフルを注射せんとせしニ，死んでも能き故注射して呉れるなとの事，致方なく御苦悶ニ対し莫比散を差上置候，依て再び先生御来診被下か，若しくハ注射ニ換へる内服薬を御遣し被下度奉願上候，早々

十二月八日　　太三次　拝

先生閣下

4　明治　年11月17日　（2586）
謹啓，未だ一回之拝靄を得不申候得共実弟太三次ニ依リ常ニ御機嫌麗はしく被遊候趣き承り居リ恐賀至極に奉存候，次ニ太三次事も今回学説及実地の両試験ニ幸ひ合格致候由，回顧致せば前期合格以来僅か二ケ年は短日月ニ於て後期試験ニ及第致せしは偏ニ博士閣下の御薫陶宜敷ニ基きし事明白にして亦本人よりも深く感謝の旨報じ来候，弊門一同只感涙に咽ぶの外無御座，伏て御礼申上候，何卒今後共宜敷様御指導被下度奉懇願候，尚々奥方様えハ男爵閣下より御宜敷御鳳声被下度奉希上候，早々再拝
十一月十七日　福迫太市
池田謙齊（ママ）様　侍史

［118］船曳清修の書簡

船曳清修は洋方産科医として初の侍医．多くの皇子王女の生誕に関わる．清修の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』上巻に7通掲載．未掲載分を記す．

8　明治　年2月9日　（3224）
益御康冲奉賀上候，陳は綾小路従二位殿[1]処方，一昨七日御教示之通調進仕置申候，然ル処昨八日午後悪寒ニて御困り之趣，最も発熱之模様も無之飲食従前之通と申事，今九日午十二時診察仕候処，脈搏六十六肌温亢進之趣ニも相見へ不申，今日は気分もよろしく飲食常調腫気従前之通ニ候へとも，尿量大ニ減少，八日之全量漸く一合八勺ニて此間中よりハ半量ニも相成不申候，先ツさしたる異状ハ相見へ不申候へとも，何分御老年之御事懸念之至ニ候間，何卒乍御苦労今明日之中御高診奉希上候，御薬ハ今日中七日御示之処方差上有之候，先ハ右願迄，頓首拝啓
二月九日正午　清修
池田先生　侍曹

(1) 綾小路従二位　綾小路有良（あやのこうじありかず）．公家華族．代々和琴・箏曲・神楽等の師範家．左少将・雅楽部長．子爵．嘉永2年生，明治40年6月没．享年59．（1849–1907）

［119］古谷正威の書簡

古谷正威は明治20年東大医学部別課卒業生．

1　明治23年9月12日　（2612）
（封筒表）東京神田駿河台北甲賀町九番地
池田謙斎殿　閣下　平信
（消印　相模大□□年九月□□日ロ便）
（切手弐銭）
（封筒裏）封　相州大磯山縣殿別墅ニて
九月十二日　古谷正威
（消印　武□東京二十三年九月十□日）
（封筒のみ）

2　明治　年8月9日　（2611）
謹啓仕候，陳ハ小子本日一番汽車ニて小田原を出発いたし，午前九時帰京仕候，閣下とハ大船ニて行違ひニ相成候事と存候，小子病気も大ニ宜しく咳嗽発熱とも全く無之様ニ相成申候，是実ニ転地之効力と喜居候，乍不及御留守中ハ勉強仕居候間，乍憚御休神可被遊候，不取敢右奉申上度如斯御座候，頓首
八月九日　古谷正威
池田恩師　閣下

3　明治　年8月7日　（2613）
謹啓，吉原殿儀今朝来不出来之由申参り候間，御立寄遊ハし被下度奉申上候，又木戸殿奥方先ツ好容体ニ御座候，御帰館之上委曲可申上候，拝具
八月七日
大先生　御左右　古谷正威

4　明治　年1月14日　（2614）
今夕五時過外山殿御見舞申候所，体温四十度六分弱有之全身熱灼，依テ氷嚢弐箇許相貼申候，脈搏ハ百二十有之，今朝ヨリモ大ニ實且太となり食気も幾分か有之申候，氷嚢貼附後午後六時ニハ四十度四分，后後七時過ニハ四十度二分となり，漸々下降有之申候，八時頃マデ先生之御来臨相待申居

候へ共，御越し無之，依テ外山殿ニ相談いたし候へ共泊リ呉れずとも宜敷様之口気有之候間辞去いたし相帰り申候，何卒明日先生外山殿へ御越之節，小子を泊め被下候との一言外山殿へ御申聞被下度奉願上候，左なくてハ小子の一存ニて泊る様ニ聞へ，先方之手前悪敷候間，何卒明日御越し之節，一言先方へ奉願上候，右ハ御帰り相待申上度心得ニて只今まで御待申居候へ共，無其儀ニ付乍恐以書面奉申上候，猶明朝拝顔可申上候，敬具

一月十四日夜十一時　　古谷

恩師　閣下　御左右侍史

［120］帆山勇の書簡

帆山勇は明治13年東京大学医学部別課卒業生.

1　明治　年8月29日　　(2648)

謹啓，時下残暑之候益御清適御座被為渡候条恭賀之至リニ奉存候，陳ハ私在京中ハ実ニ不容易之御高恩ヲ蒙リ候仕合，難有深御礼申上度奉存候，私義も廿五日無事着港仕リ神戸医学所教員拝命仕リ候仕合，就ては当分在港罷在候得共，何れ帰京モ仕度志願ニ罷在候得は何分向後トモ御愛憐之程奉願上候，在港中当地并ニ京坂ニ何ニカ御用モ被為在候節は何卒被仰付度奉存候，先ハ右申上度如斯ニ御坐候也

八月廿九日　　帆山勇　敬白

池田先生　侍史御中

［121］堀本好益の書簡

明治3年4月付馬嶋春庭より池田謙齋宛書簡（日本医史学雑誌第58巻第1号98頁に所載）に北海道宗谷詰3等医堀本好益の名前がある.

1　慶応4年6月15日　　(2660)

此度御取高御定ニ付，先日朝臣相願候哉，御暇相願候哉之両様被仰出候得共，私先祖高弐百俵拾人扶持ニて召出，乍恐常憲院様[1]御代より只今迄御奉公仕候ニ付，向後御切米等一切頂戴不仕候共生活之道は医術以家名相立候心得御座候間，別段朝臣之義不奉願，是迄之通御奉公之義被仰付候様奉願度此段奉願候，委細之義は私支配貴志弥三郎殿医学所頭取衆えも言上ニて申上置候間，御尋之義奉願候，以上

六月十五日　御用人支配　医学所出役

堀本好益　印

(1) 常憲院　第5代将軍徳川綱吉の法号.

［122］前田信輔の書簡

前田信輔は慶応4年6月9日より明治元年10月24日まで幕府医学所を接収しその運営に当たる. 信輔の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』上巻に1通掲載に付き省略.

［123］馬嶋春庭（譲）の書簡

馬嶋春庭（譲）は明治2年北海道開拓使1等医師. 官立札幌病院初代院長. 天保5年生，明治35年没. 享年69.（1834–1902）. 明治3年4月箱館詰1等医師馬嶋春庭より池田謙齋宛書簡2通あり. 日本医史学雑誌第58巻第1号98頁・100頁に掲載に付き省略.

［124］松岡勇記の書簡

松岡勇記は井上馨家の掛り付け医師. 勇記の書簡は日本医史学雑誌第56巻第4号542頁井上馨家書簡の項に3通掲載に付き省略.

［125］松野稟郎の書簡

松野稟郎は九條家出入りの医師か. 稟郎の書簡は日本医史学雑誌第58巻第1号94頁九條家書簡の項に1通掲載に付き省略.

［126］松原の書簡

松原の詳細不明. 書簡の内容より医師と推定した.

1　明治　年12月23日　　(2755)

拝啓，幾子殿少々気管支ノ方少々不宜，且熱気も聊有之歩行等ニハ脚部痛ミを覚え，感冒ニてハ無之哉共存候ニ付，今明両日之内一寸御来診被成下度此段御願申上候也

十二月廿三日　　安藤坂　松原

池田様　侍史

［127］松本順の書簡

男爵　松本順の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』上巻に9通掲載に付き省略.

［128］丸茂文興の書簡

丸茂文興は宮内省3等薬剤生・侍医局医員を勤める．文興の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』上巻に3通掲載．未掲載分を記す.

4　明治　年6月19日　（3246）

拝啓，霖雨之節ニ候得共益御安寧奉恐賀候，陳は過日は条家ニおいて産児所労ニ付，毎々御臨駕相願難有奉多謝候，其後はさしたる異状も無御座候処，昨夜一時頃啼叫震慄之容子申来一診仕候所，本日は不大便之義ニ付満久利[1]二回ヲ相用上圃後前症相発シ候事ニ承リ，其后続て些少之便通有之啼叫も相止申候，全ク便通之為め腹痛相発し候事歟と愚考仕候，就ては御多用中恐入候得共，今日御差繰御枉駕被降度奉願上候，尚書外は拝晤之節申上度，草々拝首

六月十九日　文興　拝具

池田様

（1）　満久利　まくり．海人草（かいにんそう）．回虫駆除剤.

5　明治　年8月2日　（3247）

拝啓，厳暑之節候処，益御清祥御奉務奉欣賀候，然ハ甚恐入候得共，三條家富田藤太実母義過日来胃病之所，両三日前胃血少々吐出し，其後蚘虫[1]等も二條吐出し食欲不揮追々衰弱相加リ難渋仕居候間，御高診被下度奉願上候，富田より出願可申上之所，依頼ニ付小生より奉願上候，御繰合御尊来之程奉願上候，草々頓首

八月二日　文興

池田様

尚々富田住居ハ虎ノ門内にて三條家邸内ニ御座候

（1）蚘虫（かいちゅう）　回虫．腹の虫.

6　明治　年12月10日　（3248）

拝啓，寒気増慕（ママ）之侯（ママ）愈御安健御奉務被為渡奉大賀候，然は過日中は美君殿[1]病気ニ付，段々御尊駕相願，御蔭ヲ以漸々快復被仕難有奉多謝候，且先夜は御多忙中ヲ不顧家従能勢基章御高診ヲ相願，尓後引続て諸症減退仕，昨夜来ハ真之安眠被致御蔭ヲ以不日全癒可仕存難有奉拝謝候，不取敢小生より安否御礼旁申上候，猶委細は拝顔之上万縷申上度，如此御座候，草々敬白

十二月十日　文興　拝

池田様

（1）三條公美（きみよし）　三條実美（さねとみ）の長男．明治8年5月生，大正3年1月没．享年40.（1875–1914）

7　明治　年5月6日　（3251）

拝啓，然は本日午後五時公輝殿[1]相伺候処，御蔭ヲ以体温三十七度にて更ニ熱候無御座候，気先も粗平常ニ相収，毎々御厚配ニ相成万々難有奉謹謝候，右は一時之熱発而已と愚考仕候，乍憚御休神被下度奉願上候，尚又自然明夕ニも熱発致シ候ハヽ早速申上度，先は当要詞迄申上度，如此御座候，草々頓首

五月六日　文興　拝上

池田様

（1）三條公輝（きんてる）　三條実美の三男．掌典所御歌所長．明治25年分家（男爵）．大正13年本家に戻り後を継ぐ．公爵．明治15年12月生，昭和20年8月没．享年64.（1882–1945）

8　明治　年1月2日　（3250）

拝啓，然は昨臘御嘶申上候京橋区日吉町色川誠一所有練（ママ）瓦売却物，少子直段相談ニおよひ候処，如意談判不相調旨先方より昨臘廿九日回答有之候ニ付，一応見合ニ仕候間，兼て御噂之通り御所望被為在候ハヽ御一覧之上御購求被下度，右代価ハ四千円之内談直接ニ有之候得とも其内減額ニも可相成哉予想仕居候，尚御高案之上可然御相談被下度候，別紙絵図面相添申上候，尚委細ハ拝顔之節ニ申上度候，草々頓首

一月二日　　文興　拝上
池田様

［129］宮内　廣の書簡

宮内廣は飯田町にて内外科開業医を営む.

1　明治　年11月12日　　(914)

本日は下官宿直ニ候間，宜御差図奉願候
拝啓仕候，然は松尾主人一昨朝より先下痢は一日一度位故，散方中オヒュム(1)昨日より半グレインニ減シ水剤前方調進致置候，小便は一昨十日午後一合程御座候而已にて，昨十一日午後迄不通，依てカテーテルヲ施シ八勺程有之，其後今午前十時迄更ニ無御座候，併容体依然ニ候得ハ日々衰弱加リ食気不電(ママ)，甚困難之症ニ御座候，今日は散薬重炭酸曹達二十グレインへ少々苦味之品を加へ投与いたし置候，尚御高按奉願候，頓首
十一月十二日　　宮内廣
池田先生　虎皮下

(1) オヒュム　阿片．鎮静・鎮痛・鎮咳・鎮痙・催眠剤.

［130］三宅　秀(ひいず)の書簡

三宅秀は帝大医科大学教授兼学長．秀の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』下巻に14通，日本医史学雑誌第42巻第1号101頁に1通掲載．未掲載分を記す.

16　明治17年10・11月　日　　(3510)

拝啓仕候，然は一昨日御出校之節一寸と入御覧置候別課生歎願書は小生私状相添専門学務局長え供閲ニ差出置候得共，夫而已ニテハ別課生之学年ヲ延シ，且学課ヲ増加致シ候旨意モ何分相分リ兼可申と被存候，将又本部教員一同并ニ生徒之希望モ学課改正学年ノ延期之点は確乎不動ノ持論ニ有之候ニ付，今年十一月ニ実施不致ては，尚来年十一月マテ遷延致シ候次第故，何卒本年ハ右改正ニ着手致度ニ付，至急裁可ヲ相待居候，就ては甚恐縮ニ候得共，右等之情実先生ヨリ浜尾氏え篤と御説明被下度奉希候，次ニ別課生学期変換之義ニ付ても彼是本省ニテ異論有之候得共，是又本部ニては別ニ致方無之無余儀場合ニテ第一期生ヨリ第三期生迄ニハ毎学期之終リニ学期試業(テシタメン)ヲ施行致候ニ付，毎年五月ト十二月トヲ費シ候得共，四期生以上ニハ学期試業不行候ニ付，従来之授業時間之外ニ尚二十日(五月ト十二月)間ヲ授業時ヲ相増候訳ニ付，此義も至急裁可不相成ては当年十一月ヨリ実施致兼，甚不都合ニ付是又至急允許有之様御説明被成下度候，次ニ長与氏は何日比帰京之様子ニ候哉，過日相伺度存居候処失念仕候，同君帰京次第試験用患者貸与之件は至難之事情宜敷先生ヨリ御説明被下度，小生ヨリモ乍不及申陳可仕と存居候，以上之件参邸之上可申述と存候得共，御繁忙中却て御妨と存，且は即今試験対策（九十六人分）取調中ニテ寸暇ヲ惜候場合故乍（以下欠）

（注）出・受信人名不明なるも，医学部別課生制度は明治18年4月募集中止となる．依ってこの手紙はその前年の明治17年10・11月頃のもので，東大医学部長三宅秀が総理心得池田謙斎に宛てたと推察される．浜尾新は当時文部省専門学務局長として在任.

［131］室岡元達の書簡

室岡元達の詳細不明．書簡の内容より医師と推定した.

1　明治　年4月9日　　(2628)

其後は時下御安否御伺不奉申上失敬多罪々々恐縮ノ至，平ニ御寛恕可被下置，老先生御初御家旅(ママ)様益御壮健被為遊御消光恐悦至極奉敬賀候，次ニ迂生明治四年以来十四年マテ青森病院ニ奉職罷在候処，父母老衰ニ及侍養之者無之辞職，方今生国［南部ニテ］開業罷在候，乍恐御休意思喰被下置度奉伏願候，偖這般私親類佐藤清助ト申者去ル十二年来眼疾ニ罹り岩手病院在職中南部精一先生及医学士浪沼貞吉先生之療治相受候得共寸効無御坐，此度登京為致候間，御診断被下置御治療ノ程奉懇願候，先生之御揚名ハ新聞紙上ニテ屡々拝閲乍蔭歓喜罷在候，右懇願旁時下御安否御伺申上度，呈愚書候，恐々謹言

四月九日　室岡元達
池田先醒
二伸，御家旅中様へも乍恐時下御安否御窺宜御鶴声奉希上候，田代先生及渋谷彦一先生ニ御面会ノ際よろしく是又奉伏願候

［132］森　静雄

森静雄は森鷗外（林太郎）の父．石見国津和野藩々医．明治5年旧藩主に随って上京，千住にて橋井堂医院開業兼区医として貧民救済医療に努める．天保7年生，明治29年没．享年61．（1836–1896）

1　明治　年8月23日　（2811）
（端裏書）池田健斉（ママ）様　病用書　森静男
不相替暑気強御坐候得共，先以御安全御務奉賀候，過日は参館御厄害仕，其刻御尊診被下候病人仰之通手当仕候処，少シは快方ニ御座候，尤橋元氏御内室頭痛は大ニ減じ候得共，何分脈度多く右ニ準じ心動強，御診察之上御高案被仰下度奉希候，且亦邸内山辺土夫室も御覧相願度，当人も矢張同様之容体，委は本人より御承知可被下候，右御願申上度ニ付御在宿を相伺ニ差上申候，委被仰置候様奉願候也
八月廿三日　森静男
池田先生　貴下
二白，乍末御尊母様初御家中様方え宜御伝声奉希上候

［133］森永友健の書簡

森永友健は明治14年東大医学部卒業．東大御用掛．27年侍医局主事．弘化4年佐賀生，昭和11年没．享年90．（1847–1936）

1　明治　年3月1日　（1074）
中野御母堂御容体書
過日御高診之節御手当之通り薬用相施候処，翌朝迄テニ大便数回之快通アリ，食気稍々振起シ一日位ハ胸内苦悶・呼吸不斎（ママ）等之発作減少セリ，（欠）ニ其発作増加ス，随テ身体漸々疲労シ脈搏ニシテ九十搏，温（ママ）体三十六度五分，尿量可ナリ通ス，右御容体申上候
三月一日　森永友健
池田先生　閣下

2　明治　年5月31日　（72）
謹啓，然は先生ニハ昨夏御病居之御厭モ不被為在，永々之御供奉中嘸々御不自由被遊候由，実ニ御洞察申上候得共，先々終局之上無御滞御帰館被遊御光栄之程偏ニ奉恐賀候，随て松魚節壱折，聊カ御歓悦之検迄ニ進上仕度候間，何卒宜敷御披露被成下度，御願申上候
五月三十一日　森永友健
池田先生　執事御中

［134］守屋　一の書簡

守屋　一は福井藩士．長崎にて医学修業．軍医として西南戦争後衛戍病院勤務．明治26年没．娘は守屋東で日本キリスト教矯風会・日本禁酒同盟・廃娼運動等社会運動に活躍．

1　明治11年1月1日　（2818）
謹賀新年　頓首再拝
明治十一年一月一日　守屋　一
池田先生　侍史

［135］矢城乕郎の書簡

矢城乕郎の詳細不明．書簡の内容より医師と推定した．

1　明治　年12月22日　（3327）
拝呈，寒冷相増候得共益々御清健奉賀候，陳て（ママ）於栄殿扁桃腺炎之左側之もの少々潰爛之状有之，今夕熱三十八度四分ニ御坐候，右御容体申上候間御都合ニて御来診相成り度奉希望候，早々拝具
十二月二十二日夜　矢城乕郎
池田先生
尚々今夕より塩剥[1]二ドラクマ　水二十オンス含嗽，四日間御便秘ニ付甘汞[2]六グレイン頓服ニ差上置き申候，水剤前方，右添て申上候，早々頓首

（1）塩剥　塩化カリ.
（2）甘汞　塩化水銀.
（注）この症状はジフテリアと思われる.

［136］山内時敏の書簡

山内時敏の詳細不明．書簡の内容より医師と推定した.

1　明治　年5月31日　（2843）
拝呈，時下不順之気候先以御多祥被遊御坐奉大賀候，過日は参堂御妨け申上候而已ナラス不計御高診を戴き意外之幸福万々奉拝謝候，却説向嶋池田家小児目今為差異状も無之候得共生来薄弱，過日も鳥渡申上候通り大便通利一昼夜間十二三回有之，毎回極少許ニて水分多く夫か為メ幾分か栄養ニ妨害ヲ及し，依て御教示之通両三日来稀薄之石灰分内用相試申候処，少々ハ景況宜敷御坐候得共一応御高診相願置度惣方之志願ニ付御多忙之御中恐縮之至ニ奉存候得共，来ル三日或ハ五日（四日は先方ニ故障有之）両日之内午後第三時頃御繰合御来臨被下度，御許容被下候得は右両日之内御都合ニ寄り御取極メ之上，乍御手数御回答奉希上候，草々謹述
　第五月卅一日　山内時敏
　池田先生　閣下

［137］ヤマガタサブロウの電報

ヤマガタサブロウの詳細不明．書簡の内容より医師と推定した.

1　明治24年11月25日　（2962）
電報
（消印　武蔵・東京神田・廿四年十一月二十五日）
スルカタイ　イケタケンサイ
ハキ　カワシマカツ　カタ　ヤマカタサフロ
ハギ
十一月二十五日
□九五
六九
イヒシマ
着　第八十六
ヲテカミトドイタフクブハタヘズレイアンシクフウザイ[1]アヘンザイカンチヤウホウハコレマデホドコシタレドコウナクチリヤウニコマル
「お手紙届いた．腹部は絶えず冷罨し，駆風剤・阿片剤・灌腸法はこれ迄施したれど効なく治療に困る」

（1）クフウザイ（駆風剤）　ガス抜き剤.

［138］山縣直吉の書簡

山縣直吉は子爵野村靖家の掛り付け医師．直吉の書簡は日本医史学雑誌第57巻第3号365頁野村靖の項に1通掲載に付き省略.

［139］山川幸喜の書簡

山川幸喜は明治8年侍医．10年退官後数寄屋橋にて開業．幸喜の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』上巻に23通掲載．未掲載分を記す.

24　明治　年12月23日　（3125）
前略，御厚免可被下候，然ハ岩倉槇山殿一昨夕御参診被下候已後，昨夕迄ハ御異状無之，夜ニ入両度程大便青黒色之物ヲ通じ，少々結腸部ニ疼痛ヲ覚へ，次デ例ノ胃部劇痛と相成，［本日午前二時頃］即刻参上ニて六分グレイン注射候処，漸次御鎮静ニ相成候，将又五時前胃部之痛前之如ク，直ニ再前薬注射仕候処，十分之鎮静ニ相成不申，只今甘硝精[1]二十m相用候ハヽ，先鎮痛之姿ニ相成申候，就てハ雨中至極願兼候得共，可相成ハ今朝之中御来診奉願上度，若又御差支も御坐候ハヽ，何時頃御来臨可被下候哉此段奉伺候，不取敢右願用，走（ママ）々頓首
　十二月廿三日朝　山川幸喜
　池田大先生　呈閣下

（1）甘硝精　甘硝石精．亜硝酸エチル．鎮痙剤.

［140］山崎元脩の書簡

山崎元脩は明治9年東大医学部卒業．13年より16年4月迄新潟医学校々長.

1　明治11年4月14日　（2954）

久敷御無沙汰仕恐縮罷在候，時下暖気ニ相向ひ候処，愈御清適奉賀上候，扨て熊ノ森老君御病中より御逝去后，引続き御尽力嘸々御疲労御事御愁傷之段奉遠察候，今般は結構なる白紬三反御恵投毎度御親切難有拝納仕候，達吉様先月十六日医学校え入舎[1]被成候，至て宜敷都合候間御案事被下間敷候，日ニ増し御昇達末頼母敷存候，かや・字引き共正ニ御預り申候，又達吉様小生方ニ御出中，飯料として合セて八円五拾銭御預り申置候，強て御断申上候へ共，池田様御聞入無，無余義預り置候，素より小生月俸等頂戴仕候てハ不相済義故，追々御入用之品并ニ池田様へ申かたき小遣等ニ内々少々ツヽ御渡し申上候等（欠）と心得ニ候，御うつ（欠）印迄些か心底申進之候（欠）叱留被下度候，右申上度如此，余は后便万々可申上候，恐々不一

四月十四日　山崎元脩

入澤様[2]

時下折角御厭ひ被下度候

（1）入澤達吉著「思出の記」によれば，達吉は明治10年12月より11年4月迄東大に近い本郷弓町に住む山崎元脩氏宅に寄宿し，その後大学寄宿舎に入舎したとあり．

（2）新潟今町に住む入澤達吉の母ただ（唯）か．

2　明治　年3月21日　（2955）

拝啓，春暖愈御清福奉賀上候，存外御疎闊ニ打過多罪々々，陳は荊妻[1]義十九日朝血痰ヲ吐し，三回程之後相止候故，吐根[2]浸相置候処，廿日朝稍多量ニ吐し，夫より今以テ止マス，今朝少々吐し，微熱有之咳嗽ハ全ク止ミ候，些（カ）晨朝少々有之ノミ，誠ニ心痛罷在候間御多忙中何とも恐縮之至ニ御座候へ共，医学部御出勤之節ニも一寸御枉駕相叶間敷哉，小生以参懇願可仕之処，何分人少ニて離れかたき候，乍失敬書中ヲ以テ懇願仕候，恐々頓首

三月廿一日　元脩

池田先生　硯北

（1）荊妻　山崎ます．ますは竹山屯の兄祐卜の娘．明治9年山崎元脩に嫁する為，達吉と共に上京する．1女を出産したが，12年に病没した．

（2）吐根（とこん）　アカネ科植物の根．催吐剤・鎮咳剤・発汗・止泻剤．アメーバ赤痢の特効薬．

3　明治　年　月　日　（3300）

謹て拝読，過日は御多端之中昇館寛々御奔（ママ）走ニ相成難有奉拝謝候，兼て御配慮被下置候件昨夕刻，廿二日出頭之召状到来ニ付明日拝命之事ト被察候間，此段御安慮被下度候，小生前ニ可申上之処，却て御通知ニ相成恐入候，近々拝謁御礼万々可申上候，恐々敬白　山崎元脩

池田先醒　御侍史中

4　明治16年3月8日　（2953）

芳牘謹て拝読，残寒未去処愈御清祥奉恭賀候，小生無異消光罷在候間，乍憚御放念被下度候，爾来意外之御疎遠申上多罪此事ニ候，扨テ今般小生方向上ニ付御懇篤ニ御配慮被成下，毎度御厚情奉鳴謝候，昨年出京之際申上候通，兎角世間我等両人之間ニ葛藤[1]有之風説不止，為メニ益々県令之嫌疑ヲ深クシ到底氷解之域ニ運ひ不申義ト考，愈本月下旬或ハ来月初旬断然辞シテ出京之事ニ決心いたし居，現今ハ其準備中ニ有之候，然ルニ此程愛媛県転任云々之御紹介ヲ蒙り難有奉拝謝候，右県ハ暖地ニシテ拙者之身体ニも適し，且ツ旧親友渡辺氏も参り候事故，実ニ適当之処故早速御配慮願上可申義ニハ候へ共，何分老母愚兄共ニ遠国ハ故障ナランカト被察，又小生も飽迄東京ニ於テせめて半年も滞留いたし，実地研究仕度精神ニ付，折角之尊慮ニ背き候も恐縮ニハ候へ共，今般御申越し之転任丈ケハ御見合被下候様奉懇願候，併し来月下旬迄ニハ無相違出京仕候間，何卒此下共宜敷御添心之程伏て奉願上候，三月ハ辞シ郷里ニテ亡父十三年回ヲ営ミ，早速出京之都合ニ仕置候処，本年ハ意外之雪ニテ到底当月中ニハ女子ヲ連レ道中も無覚束被存候，出京ハ来月廿日頃迄延行仕候，何れ来月下旬迄ニハ出京候間，其際万縷可申上候，右申上度奉復迄如此，墨外拝謁縷々可申上

候，頓首敬白

三月八日　　山崎元脩

池田謙斎先生　御侍史中

（1）新潟医学校々長　山崎元脩と同校病院長竹山屯との確執を指す.

［141］山崎庸哉の書簡

山崎庸哉は池田謙齋塾に居た仙台の医師.

1　明治　年6月6日　　（2956）

拝啓，然ハ昨夜幼姫様ノ御病症ニ付，向島池田様より御使者参り候ニ付，小生参上拝診仕候処，別ニさしたる御替りも無之，先生兼テ御申置ノ半身浴為致候様申上置候外，御薬ハ御前方の事ニ申上候，就テ御主人并ニ家扶方今日御繰合ヲ以テ先生ノ御来診ヲ願上度旨呉々被申聞候，此段奉申上候，頓首百拝

六月六日　　山崎庸哉

大先生　閣下

2　明治17年6月16日　　（2957）

一翰奉呈仕候，時下向暑ノ節ニ御坐候処，大先生益御勇健被遊御坐謹て奉南寿候，然ハ小生在京中ハ不浅御高恩ヲ蒙り御高庇ヲ以テ出雲の楷梯ニ縋り御礼筆紙ニ難述尽感肺（ママ）銘肝長ク忘却不仕候，猶此上無御見捨御引立の程偏ニ奉懇願候，末筆恐縮の至りニ御坐候得共，御隠居様御始メ奥様ニ宜敷御礼奉希上候，先ハ在京中の御礼申上度呈乱筆候，謹言

十七年六月十六日　　山崎庸哉　百拝

池田大先生　閣下

再伸，去ル十二日東京出発以来海上無事，一昨日到着仕候，此段御休神被成下度奉願上候

［142］山科元行の書簡

山科元行は侍医局勤務・侍医補．元行の書簡は『東大医学部初代綜理池田謙斎』下巻に3通掲載に付き省略.

［主要参考文献］

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典」』朝日新聞社 1994年11月30日発行

池田文書研究会編『東大医学部初代綜理池田謙斎』」上・下巻　思文閣出版　2007年2月25日発行

日本歴史学会編 『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行

吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』より遠藤正治著「明治期の侍医制度と池田文書」思文閣出版 2001年5月11日発行

大植四郎編『明治過去帳』東京美術　1971年11月20日発行

稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術 1973年5月15日発行

（本稿に於いて詳細不明の医師 福井周作・［安藤坂］松原・室岡玄達・矢城乕郎・山内時敏・ヤマガタ　サブロウに就きご知見のある方は順天堂大学医学部医史学研究室までお知らせ下さい.）